



中野本郷

令和5年度11月号
令和5年11月1日
中野区立中野本郷小学校
校長 福山 広伸
児童数 322名

「せんせ〜い、いいですか？」

校長 福山 広伸

私が教員になって2・3年目の頃のお話です。私のことをよく気にかけてくれていた先輩の先生がいて、その日も空き時間に私の教室の様子を見に来てくれていました。

その時、授業中に「先生、トイレにいいですか？」と言ってくる子がいました。日頃から時折ある普通のことで特にめずらしいことはありません。私はいつもどおり「いいよ、行っといで」とこたえます。

その日の放課後、その先輩先生は、私に「授業中にトイレに行くことを福山先生は“いいこと”だと思う？」とたずねてきました。私は「行かせないわけにはいかないです。でも、本当は休み時間にトイレは済ませて、次の学習準備に入ってほしいと思っています。休み時間ギリギリまで遊んでからもどってきて、そのまま授業が始まり、トイレに行きそこなう場合が多いみたいです。」とこたえました。すると先輩の先生は「じゃあ“いいこと”とは思っていないんだよね。それなのに、福山先生は子どもへ『いいよ』って言ってたよ。」と。

私は「…??」。先輩の先生は続けて言いました。「福山先生の学級の子は、授業中にトイレに行くことは、『良くないこと』とは思っていないのでは？ 分かりやすく言うと『別にそれでもいいこと』と思っていないかな。」さらに最後には「普段から、子ども自身に正しい判断・行動ができるように指導していくことが、担任の仕事だよ」とも言われました。

確かに、授業中にトイレに行かなくて済むように、自分の行動を気をつけるような雰囲気は、私の担任する学級にありませんでした。何気ない日々の担任の言葉から、学級の子どもたちは自分自身の価値観や常識、物事の見方・考え方を築いていくものであることに気づかされました。それからというもの、私は日常の中で子どもたちが発する「先生、いいですか？」という言葉に対して、妙に敏感に反応し、気になるようになりました。

図工の時間のことです。クラスの子が次々私のところに来て、一生懸命に仕上げた作品を見せて、「先生、これでいいですか？」というのです。作品づくりでの取り組みでめあてや課題とする点は伝えてあります。その上で、作品に対して精一杯自分で取り組んで完成させたものを、私は「ダメ」とは言えません。「いいですか」or「ダメですか」を先生にたずねる子どもの心の中は、いったい何を担任に求めているのでしょうか？ 私とすれば…「先生！これ見て！、今日がんばって作ったよ。」と見せに来てほしいし、そうすれば「うん、〇〇を工夫したのがよく表れているね」「ここを丁寧に時間をかけてのがわかるよ」と、学習のポイントにそった声かけをしてあげられます。大切なのは、課題にそった取り組みとその制作過程も含めて「自分自身が充実した活動ができたか、自身で満足できる作品ができたか」ということです。この時の子どもたちは、きっと「自分を精一杯に表現する作品を作る」ことより、「先生が“いい”と言う作品」を求めて活動してしまっていたのではないのでしょうか？

その後も・・・私は、「先生、トイレに行っていていいですか？」と善し悪しの判断を、担任に何う言葉で申し出てきた子には、「授業中にトイレに行くことを、私は“いいこと”だとは思いませんよ」と返すようにしました。時には「あなたは授業中にトイレに行くことがいいことだと思うのかな？」と聞き返してもみました。オシッコを我慢している子にとっては、期待外れで何ともめんどくさい担任からの返答であったらうことは、その時の子どもの表情からも容易に想像できます。当然その子は困惑状態。とりあえず「いいとは思わないけど、行ってらっしゃい」と言ってトイレに行かせました。

そんなことを度重ねていると、少し様子が変わってきたのです。「先生、ごめんなさい。トイレに行かせてください」と言ってくる子が現れました。なんと「申し訳無い」という言葉とともに、「お願い」の言葉で私に申し出てきたのです。お願いをされれば、当然それを受け入れて、私は何も余計なことは言わずに「はい、どうぞ…」とだけ返しました。みんなの学習を中断させてしまうことと休み時間にトイレを済ませておかなかったことで授業を中断しトイレに行くことになったことについて、「ごめんなさい」の謝罪の一言が最初にあったのだと思います。その上でこの子は、授業中のトイレを正しいことではないと承知した上で、それでも今トイレに行かせてほしいがために「お願い」の言葉となって私に伝えてきたのだと私は理解しました。

先生が「いいよ」「だめだよ」と言っている限り、常に先生が判断基準であり、先生がルールとなってしまう、子ども自身の行動決定・意思決定が先生によって成されてしまいます。これを当たり前と思っていたら、自分に都合のいい答えをのみを受け入れ、自分が期待する答えを返してくれない人には不満もつようになるかもしれません。そうして、知らない間に子どもの心に依存心を植え付け、自己責任や自己判断の意識を弱めてしまうことになり、更には、子ども自身の「判断力・判断基準」「自主性」「主体性」など、自己形成を妨げてしまうことにもなりかねません。子どもたちへの支援の声かけの仕方は、とても重要だとわかっていても、それがまたとても難しく、今でも迷いながらの毎日です。

11月の生活目標 力を合わせて仕事をしよう

学校では、子どもたち全員が学級や学校のために日々様々な仕事をしています。日直や給食などの当番活動、係の仕事、5・6年生は委員会の仕事もあります。自分の仕事に責任をもって取り組むことは、集団生活をしていく上でとても大切です。一人では大変なことも、友達と協力することで速く楽しくできます。子どもたちは、充実した学校生活を送るために協力することが大切であることを日々実感しています。

様々な仕事を通して協力することの大切さを感じ、自らすすんで行動できるように指導していきます。ご家庭でも、家族の役割について話す機会にいただければと思います。 (生活指導委員会)